## ポンペと小島養生所

## 本会幹事 吉野誠次

ヨハネス・リディウス・カタリヌス・ポンペ・ファン・メールデ ルフォールト(以下、ポンペと略)は、1829年オランダの ブルッへ(現在はベルギーのブリュージュ)に生れ、1845 に願い出た。 年ユトレヒト国立陸軍軍医学校に入学した。

1849年同軍医学校を卒業、オランダ陸軍軍医となり、 安政4年(1857)第二次海軍伝習隊の教官(オランダ商 館医、着任後、医学伝習所の教官となる)として来日し た。

以下、長崎におけるポンペについて、その著(ポンペ著 沼田次郎他訳『ポンペ日本滞在見聞記』雄松堂出版 1968年)をもとに記述する。

ポンペが長崎奉行所西役所に開設された医学伝習所 年11月12日)は、近代西洋医学教育発祥の日であり、 11月12日は、現在、長崎大学医学部の開学記念日とさ れている。

ポンペは、言語も碌(ろく)に通じない伝習生に懸命に 自分の学問を教えようとした。しかし、ポンペにとって、最 も困難だったのは教科書がないことだった。

ポンペは、このため前夜遅くまで講義要領を書くことに 忙殺された。講義は、その講義要領を松本良順に渡す ことから始まった。

ポンペは、自然科学を基本とした体系的な近代医学を 日本で初めて導入した。その講義の内容は、物理学、化 学等の基礎学をはじめ、解剖学、病理学、外科学、内科 学、調剤学、眼科学、生理学、繃帯(ほうたい)学、組織

学に及ん だ。

安政5年 (1858)7月、中国経 由で長崎港 に入港した アメリカ軍 艦ミシシッ ピー号でコ レラが発



生、市中にも蔓延した。

ポンペは、激しい下痢を伴うコレラに対し、熱を下げる 薬のキニーネや腸の運動を抑制するモルヒネを使用す る治療法を用いた。

ポンペは、伝習生たちにも病気の特徴と治療法を教 え、その予防と治療に尽力した。また、コレラが全国に流 行し、多くの犠牲者を出したことから、ポンペは、この病 気を日本語で解説した小冊子を印刷して全国に配布 し、予防に努めた。

ポンペが授業の中で特に熱心に教えたのが解剖学で

あった。人体の知識を得るためには人体の解剖の実習 が必要と考え、解剖実習用の死体の提供を長崎奉行所

しかし、人体の解剖という概念が一般的でなかった当 時、その批判を恐れた長崎奉行所は、許可することを躊

ポンペは、根気よくその必要性を訴え続けた結果、つ いに死刑囚の死体で解剖の実習を行う許可が出され た。

解剖の実習は、安政6年8月13日(1859年9月9日)か ら3日間ポンペの指導のもと、現在の長崎市西坂町付近 で行われた。実習に参加したのは、伝習生たち合わせて において、医学伝習を開始した安政4年9月26日(1857 45人程であった。その中には、シーボルトの娘楠本イネ もいた。

> ポンペは、幕府に医学所と付属病院建設の必要なこと を何度も提言した。医学所や付属病院があれば、そこで 病人を規則正しく看護できるし、伝習生たちへの臨床教 育を行うことが出来るからである。

> 医学所と付属病院(万延元年(1860)養生所と命名) は、建設に関する色々な問題はあったが、文久元年(18 61)完成した。

この養生所には8つの広い病室があって、各室ともそ れぞれ15のベッドを収納することができた。

文久元年8月16日(1861年9月20日)養生所の開院 式が行なわれ、幕府の命で東棟に日本国旗が、西棟に オランダの国旗が掲揚された。



文久2年(1862)ポンペは、帰国することになった。安 政4年(1857)の来日以来、5年もの滞在であった。ポン ペは、全ての講義の終了後、修業証書を全学生に授与 したが、その内訳は第一級(優)が22名、第二級(良)が1 6名、第三級(可)が23名であった。

全ての任務を終えたポンペは、文久2年9月10日(186 2年11月1日) 長崎港を出港、帰国の途についた。

本稿は令和4年6月例会の発表(「ポンペとその師弟達」) 要旨である。